

編集後記

(56巻 第4号 2010年4月)

2010年4月1日から、国立がんセンターを含む6つの国立高度専門医療センターは独立行政法人となる。国立がんセンターは「独立行政法人国立がん研究センター」と名前を変えるようだ。

以前から国立がんセンター、特にセンター病院のあり方には疑問を持っていた。今はやりの「かかりたい病院」「手術数の多い病院」では、ほとんどのがん種でトップである。国が管理運営するがん病院が、一般の病院のように手術数を競う病院であって良いのだろうか。呼吸器や循環器に併存疾患のあるがん患者を受け入れない病院であって良いのだろうか。さらに言うと、がんセンターにかかるすべての患者にはなんらかの臨床研究に参加してもらうような制度が必要ではないか、などと感じてきた。今回の法人移行に関して、名前に「研究」の文字がついたことは大変重要なことであると思うし、そのような組織に変貌してほしいと願っている。しかし、そうであれば独立法人などにならずとも、ナショナルセンターのままで良かったのではないかとも思う。今の医療状況では、研究と診療が採算的に両立出来ないことは、全国の大学病院が実証済みである。

今回の法人移行に際して、理事長が嘉山元山形大学医学部長となる。これまで嘉山先生が強調してこられた医師の待遇改善などの改革をがん研究センターで実現してほしい。政府のお膝元の医療従事者が幸せに働ける環境ができなければ、地方の医師達が幸せになれるはずも無い。

(小川 修)